

結 言

短期入所生活介護（以下、ショートステイと称す）とは、介護保険の給付対象となる居宅サービスの1つであり、要介護高齢者を特別養護老人ホーム（以下、特養と記す）などの施設に短期間入所させ、日常生活上の世話や機能訓練などを行うサービスのことである。

ショートステイには、介護職、看護職、管理栄養士、生活相談員などの職種が配置されている。これらの職種が、それぞれの専門性を発揮して施設運営に携わることになる。一方で、ショートステイ運営研究会[2010：54-55]は、ショートステイ担当者（主として生活相談員のことを指していると考えられる）について、次のような見解を示している。ショートステイ担当者は、家族・利用者からのクレーム（持ち物がなくなった、職員の態度が悪い）、ケアマネジャーからのクレーム（予約がとれない、連絡が遅い、事故が多い）、職員（仲間）からのクレーム（利用者を受入れすぎ、なんであんな人をいれるの）を背負い込むことになる。これらのクレームが原因となり、ショートステイ担当者は離職率が高いといわれる。こうした見解をみるだけでも、ショートステイにはさまざまな問題が存在することがうかがえる。

以前、筆者は、生活相談員の自主勉強会に参加しているメンバーから、「特養よりもショートステイのほうが大変」「ショートステイには問題が多い」「ショートステイの相談員業務は難しい」といった声をきいたことがある。そういう筆者自身も、1999年から2011年までの12年間、ショートステイ担当の生活相談員をしていた。特養、デイサービス、ショートステイという3つの異なる部門で、生活相談員を経験した者としての主観的な感想を述べれば、筆者にとって、確かにショートステイが最も「難しい」という印象が残っている。しかし、どのような点が「大変」で、どのような「問題」が存在し、どのような点が「難しい」のかについては、明確に整理されているわけではない。すなわち、ショートステイには問題が多いという認識はあるものの、その問題が特定されないまま、日常業務が遂行されている傾向にある。とはいえ、全てのショ-

トステイ担当の生活相談員が、問題を放置したままにしているかといえば、そうではない。むしろ、生活相談員が日常行っている取り組み（実践）に、どのような意義があるのか整理されていないといったほうがよいだろう。そこで本書では、ショートステイにおける生活相談員の業務および実践に焦点をあて、その意味を明らかにすることで、レジデンシャル・ソーシャルワークのあり方についての検討を試みたい。

本書では、上記の研究目的に沿って、以下に示す4つの研究課題を柱として立てた。

- 研究課題1 ショートステイの意義と問題点について検討する。
- 研究課題2 ショートステイにおけるレジデンシャル・ソーシャルワークの意義とその担い手について検討する。
- 研究課題3 ショートステイにおける生活相談員業務の実態を明らかにする。
- 研究課題4 ショートステイの生活相談員が関わる援助内容を明らかにする。

次に、本書の章構成について記す。本書は、4部・8章で構成されている。第I部（第1章、第2章、第3章）は、本書のキーワードでもあるショートステイとレジデンシャル・ソーシャルワークについて概観した。第1章は、研究課題1に対応している。ここでは、ショートステイの歴史を確認した上で、その機能および問題点について検討した。第2章は、研究課題2に対応している。ここでは、ショートステイの抱える諸問題を解決に導く実践の1つとしてレジデンシャル・ソーシャルワークを取り上げ、その意義や目的、またレジデンシャル・ソーシャルワークの担い手である生活相談員について検討した。第3章では、以下の章で行う調査方法について述べた。第II部（第4章、第5章）は、研究課題3に対応している。第4章では、A施設の16種類の記録類を調査データに用い、ショートステイの生活相談員業務の特徴を明らかにした。第5章では、全国のショートステイ事業所に勤務する生活相談員を対象にアンケート調査を行い、業務の実態について明らかにした。第III部（第6章、第7章）は、研

究課題4に対応している。第6章は、第4章と同じく、A施設のケース記録をデータとして使用し、生活相談員の行う相談援助の内容を明らかにした。続く第7章では、ショートステイ担当の生活相談員にインタビュー調査を行い、ショートステイの諸問題に対する生活相談員の取り組みを明らかにした。最後に第IV部（第8章）では、これまでの研究成果を総括した上で、本書の意義と課題について言及した。本書の大きな流れをみると、第I部が理論編、第II部と第III部が調査編、そして第IV部が結論となっている。